フテリア予防接種禍などのいくつもの予防接種に起因する事故が起こっている．占領下の日本の事故や事件については歴史的な検討が十分にされていないことが多い．日本の高度経済成長期に起こった公害や薬害の研究者もこの時代の研究をあまりしていないように思われる．昭和40年前後には種痘禍を代表とする予防接種に伴う事故が多発しており，『私憤から公憤へ』（吉原賢治著）に詳しい．予防接種事故の救済制度も作られたが，予防接種法は平成6年の全面改正まで，その強制的法制度を持ち続けた．日本の現在の予防接種法に基づく行政も，現代のワクチンによる予防医学の世界的潮流からは遅れているとの論評が多い．

日本がGHQの指導で制定した予防接種法は，GHQ/SCAPの文書をたどるとFEC（極東軍司令部）の軍規文書にまでたどり着くことができる（『民族衛生』73巻，243–252頁，2007年に報告）．米国の軍規にあり，日本の最初の予防接種法には欠落しているものはPrecaution to be observedの部分である．軍規では予防接種は医官の監督下に行い，医学的に予防接種の禁忌とされるものへの予防接種は免除しなければならない，とされている前提が日本の法では欠落していた．

牛痘接種発祥の英国において1840年（天保11年）につくられたVaccination Actは，人痘接種を違法としたこと，無料接種の原則，罰金制度からなるという．英国ではその後もActは繰り返し改正されて，1898年（明治31年）には合理的理由による種痘接種免除の規定がされている．それと比較した場合，日本の明治42年の種痘法は法律の上で明らかな免除規定などはなく，実際の運用には困難を伴う事が多かったと考える．

現在のワクチン行政の混乱にも保健行政と法との問題が深く関係している．科学的，医学的に合理的な用語を日本の法律の中にどのように組み込んでゆくか残された課題は多い．

（平成21年12月例会）

日本在来馬と西洋馬

――日欧獣医学交流史と関連して――

小佐々　学

馬の家畜化は後期新石器時代とされ，伴侶動物としての歴史は6000年前までさかのぼる．馬への騎乗や馬車の利用は人間の能力を飛躍的に拡大しており，ギリシャ帝国やモンゴル帝国の建国からも分る通り，洋の東西を問わず，馬の軍事利用が強大な世界帝国を生むようになった．軍馬の優劣や頭数がその後の世界の歴史を大きく左右しており，「馬が世界の歴史を創った」と言っても過言ではない．馬の価値の増大は，必然的に馬を扱う専門職である獣医師を育み，獣医療や獣医学の発展を促してきたのである．

わが国においても，宇治川の先陣争いで知られる佐々木高綱の名馬「生嗟（いけづき）」をはじめ，合戦と武将に関する逸話は『平家物語』などの軍記物に数多く記述されている．「名将に名馬あり」といわれるように，人と馬は文字通り「人馬一体」となって歴史上大きな役割を演じてきたのは周知の通りである．

家畜化された野生馬の主要な系統は，体高が130 cmくらいの中型馬の元になった草原馬系の蒙古野馬と，体高150 cmくらいの俊足な大型馬の元になった高原馬系のアラビア馬である．この世界最高の「貴種」とされるアラブ種が英国で改良されて，体高160～170 cmの「走る芸術品」とよ

ばれる現在の競走馬サラブレッド種となった．

木曽馬などの日本在来馬は永年にわたり日本人と共生してきた貴重な文化遺産であり，現在では中型馬（体高約130 cm）と小型馬（体高約115 cm）が8種いる．遺跡出土の馬骨や軍記物の記述から，古代から現在まで体高はほぼ変わっておらず，日本在来馬は全て小柄なポニーに分類される．最近のDNA系統解析では，日本在来馬は4，5世紀の古墳時代に朝鮮半島から渡来して各地に広がったとされ，「馬がいない」という『魏志倭人伝』の記述と一致している．701年の大宝律令により軍事上重要な馬政を管轄するため，左右馬寮に馬医の役職や各地に官牧や諸国牧が設置されて，馬の飼育が盛んになった．

鎌倉時代や室町時代には実践的な弓馬術が重視されて各流派が栄えたが，幕末まで西洋式とは反対に右側から騎乗していた．馬具でも，大陸では古代から一貫して輪鐙（西洋鐙）が使用されているが，日本では馬の渡来直後の古墳時代や明治時代以降は輪鐙になったが，幕末まで独特な形の和鐙や和鞍が使用されていた．また，幕末まで馬沓という馬用の草鞋が使用されており，西洋式の蹄鉄が普及するのは明治時代になってからである．

さらに，大陸では古代から家畜を管理し易くするため，優れた能力を持つ種牡以外は全ての牡を去勢している．馬の去勢法については，中国の馬医書や西洋の翻訳書で紹介されていたが，日本では一部の特殊な事例を除き，明治時代に陸軍が軍馬育成のために去勢法を普及するまで，家畜去勢の習慣がなかった．そのため，家畜の管理や品種改良は難しく，牡馬同士が直ぐに喧嘩して暴れるため戦闘時の集団行動は困難で，合戦時には下馬して戦うのが定法であった．戦国末期に来日した宣教師フロイスや幕末期に来日した西洋人も，小柄な馬の粗暴な悪癖に悩まされており，「日本の馬は猛獣だ」と酷評する者までいた．このように，永年にわたって日本と大陸とでは馬事文化に大きな相異があったのである．

一方，日欧獣医学交流史を顧みると，天正遣欧少年使節（1582～90年）が帰国時に，アラビア馬1頭と西洋の獣医師，調馬師，蹄鉄工を連れてきたのが初来日の記録である．また，8代将軍徳川吉宗は9度にわたりオランダ商館経由で西洋馬28頭を輸入し，調馬師ケイゼルを招聘して西洋式の馬術や調教法などの導入を試みたが，一般には普及しなかった．

幕府は陸軍の近代化のため，幕末にフランスの軍事顧問団を招請したが，この時に蚕の病気で大打撃を受けたフランスの養蚕業救済のため大量の蚕卵を贈った返礼として，ナポレオン3世から将軍徳川慶喜に26頭のアラビア馬が贈られてきた．明治新政府もフランスの騎兵将校や陸軍獣医アンゴーを招聘して陸軍獣医官を養成した．また，駒場農学校（東京大学獣医学科の前身）に英国のマックブライドやドイツのヤンソンを，札幌農学校（北海道大学獣医学部の前身）に米国のカッターなどを招聘して，日本の近代獣医学の基礎が築かれたのである．

（平成21年12月例会）